

2020. 12. 20. 降誕祭主日礼拝式説教

聖書：ルカによる福音書2章 8-14 節

『美しいキリスト』

世界で最初のクリスマス、イエス・キリストが母マリアから生まれたその日、ベツレヘムから、どれくらい離れていた場所だったのでしょうか。野原で野宿しながら羊の群れの番をする羊飼いたちがいました。わたしたちが知らないような漆黒の闇の中、羊飼いたちは夜通し羊の群れの番をしていました。

突然、彼らのもとに主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたのです。主の栄光が照らすとはどういうものだったか、よくわかりませんが、いずれにせよ、明るいもので照らし出されたのでしょうか。闇の中にいた彼らにとってそれは、驚きであり、恐れだったでしょう。天使は彼らに告げます。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたの方のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなた方は、布にくるまって飼いや桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなた方へのしるしである」。

羊飼いたちは、もちろん天使を見るのも、天使の言葉を聞くのも初めて。驚きと不思議に包まれたでしょう。どうしてこんな辺鄙な場所で野宿している自分たちに天使が現れたのか。なぜ、自分たちのような貧しい者、力のない者に救い主誕生の知らせが告げられるのか。不思議なことばかりです。

中でも不思議なことは、救い主誕生のしるしが「布にくるまって飼いや桶の中に寝ている乳飲み子」だということでした。生まれたばかりの乳飲み子が「飼いや桶」の中に寝かされている、ということは普通のことではありません。しかし、その光景自体は、世界中のどこでも見られるとても麗しくて、微笑ましく、美しい光景です。両親の見守りの中にある乳飲み子、それは平安に満ちた光景です。しかしそれは救い主、という言葉とはそぐわない。

救い主、という言葉からわたしたちがイメージするのは、何らかの意味で力ある存在です。助け主なのですから。しかし天使が告げる乳飲み子は、その対極にある存在です。小さくて、弱くて、力なく、保護され、見守られ、助ける者がいなければならない存在。それは救い主のイメージとは正反対の存在です。羊飼いたちは、動物の世話を仕事としている人たちです。羊は動物の中でも弱

い存在です。まして生まれたばかりの子羊がどれほど弱い、熟知している人たちです。その彼らに向かって、生まれたばかりの乳飲み子が救い主だ、と天使は告げたのです。

飼い葉桶に寝ている乳飲み子、それがあなた方へのしるしである、と天使は言いました。しるしだと。いったい何のしるしなのでしょう。「寝ている乳飲み子」確かにそれは普通の光景です。けれどもそれがしるしだというのです。「寝ている」と訳されている言葉、元の言葉では、横たわるとか、置く、置かれるという意味の言葉です。神の独り子が乳飲み子となって、身を横たえている。それは飼い葉桶に横たえているだけではない、この世界に身を置いた、ということです。神の独り子がわたしたち人間の生きるこの世界にご自分の身を置き、この世界で生きること、死ぬことに身をゆだねた、ということです。ルカによる福音書の中で、もう一か所この言葉が使われているところがあります。それはキリストが十字架にかかり、死んで、墓に収められた、そこでキリストの遺体が横たわる、そこで使われている言葉なのです。つまりルカ福音書はイエス・キリストの地上の生涯の始まりと終わりを、「横たわる」という言葉で一つに結び合わせている。つないでいるのです。それはイエス・キリストの生涯がこの世に身を横たえる、身を置くことそのものであったことを物語っているのです。

身を置く、ということはその場所で現実的に具体的に生きるということです。頭の中だけで考えているのとは違う。そこに身を置いて、そこにいる人たちと共に生きていくということがなければ、分かり合えないこと通じないことは、山ほどあります。この世界に身を横たえ、身を置く、それはキリストがこの世界に対して献身し、犠牲として自分を差し出していく、ということとつながっています。

罪人である我々と共に生き、罪人である我々を背負い、その罪を背負い、十字架にかかり、我々の罪の罰を受けて死んでいく。その生涯のしるしが「横たわる」という一語の中に込められているのです。「身を置く」という言葉の中に込められているのです。それが、飼い葉桶に横たわり、墓の中に横たわるキリストのしるしとして、天使によって告げられているのです。

キリストがこの世界に身を置く、その根底にあるのは、愛です。人間と共

にある、ということを決意され意思されたキリストの愛です。乳飲み子になってキリストが身を横たえているのは、まさしくしるしそのものです。小さく、弱く、力ない者となって、一人の人間となって、この世界に身を置くためです。身を置いて、この世界に生きる人間と共にあるためです。わたしたちの生も死も担うものとして、この世界に身を置いたのです。それこそが「美しいキリスト」なのです。神の御心は、キリストがこの世界に身を置くことを、献身することを、犠牲としてささげられることを望まれた。そこには人間の愛があるのです。

今からもう37年前になりますが、大韓航空機事件という悲劇的な事件がありました。ニューヨーク発ソウル行きの大韓航空機がなぜか通常のコースを変更し、当時のソ連領空内を5時間以上にわたって飛び続け、ソ連空軍機に撃墜され、乗員乗客269名が命を失うという事件でした。なぜソ連領空内を飛び続けたのか、さまざまな疑問が残る出来事でしたが、その乗客の中にはアメリカに留学し、学びを終えて帰国する青年も乗っていました。ご両親にとっては一人息子。彼の帰国を心から楽しみにしていました。その息子の突然の悲報をご両親は受け取ることになるのです。

愛する息子を突然の事故で失ったご両親は毎年船でその飛行機が撃墜され、落下した海へほかの遺族の方々と出かけるのです。その場所とってただ大海原が果てしなく続く海の上なのですが、そのようすがテレビの特集番組でかつて放映されました。その場所につくと、船の上から海に向かってお母さんは息子さんの名前を呼び続けるのです。いつまでもいつまでも呼び続けるのです。テレビカメラはその光景をただずっと映し続けるのです。そして「お母さんはここよ。一緒にいるわよ。」と何度も何度も呼びかけるのです。カメラはその光景もまた、お母さんの様子をただずっと映し続けたのです。呼びかけ続ける母。海の底に沈み、遺骨も上がらない息子の名前を呼び続ける母。あなたと一緒にだよ、それは変わらぬ母の意志なのです。圧倒される愛の意志なのです。愛は一緒にいることに向かって究極するのです。

わたしはこの出来事を思い起こすとき、クリスマスは、神が人間に向かって、呼びかけ続けている出来事なのではないか、と示されるのです。神はこれまでも、人間と共に生き、人間と共に歩むことを望まれたし、事実そうしてこられた。しかし人間は神の思いを振り払うようにして、自分本位に、自分中心に生

きようと抗ってきた。しかしそれでもなお神は、人間に呼びかけ続ける。あなたと一緒に、あなたと共にあり続けていく、その呼びかけがイエス・キリストの誕生となって結実しているのです。

羊飼いたちは天使の言葉を聞いて、すべてを理解したわけでも、すべてを納得したわけでもなかったでしょう。しかし、闇の中にいる自分たちを主の栄光が照らしたように、自分たちの住むこの世界に救い主が身を置いてくださったこと、それが闇の中に光が輝くようにもうすでに与えられたのだ、ということを受け取り始めたのです。羊飼いたちはクリスマスの礼拝者になるため、歩みだしていきます。わたしたちもまた、わたしたちのために身を置き、身を献げ、わたしたちのすべてを担ってくださったまことに「美しいキリスト」を心から礼拝することから、歩み始めていきたいと思います。